



菅波 茂

21世紀は災害の世紀である。AMDA多国籍医師団は、地震や洪水などの災害被災者救援のため、被災国のみならず周辺国のAMDA支部から派遣される医療従事者で構成される。アジアや中南米での活動には、充分な対応ができるシステムになってきた。

「誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある」、そして「困ったときはお互いさま」の相互扶助精神に基づき、各国支部や姉妹団体の国際ネットワークの賜物である。この国際ネットワークが第2段階に昇華する状況になった。報告できる喜びをかみしめている。

8月18日にインド・ビハール州アラリア県のフライマリーヘルスセンターでの

人、被災者484万人に及ぶ洪水が発生した。AMDAインド支部のあるカルナタカ州のマニパール大学から本部に連絡が入った。「インド支部として7人の医療チームを派遣する」と。本部はこれの連絡に呼応して、ネパール支部とバングラデシュ支部に医療チーム派遣を要請した。本部からは1人の調整員を被災地に派遣した。

被災地の状況は複雑であつた。最近辞職したビハール州アラリア県の前知事がNGO優遇策を実施していたこともあつて、AMDA医療チームが被災者に2、3時間も取り囲まれる不測の事態もあつたが、おおむね歓迎的な雰囲気の中で活動を終えることができた。

その内容は、ビハール州アラリア県のフライマリーヘルスセンターでの

台湾、インドと続いた国際ネットワークの「昇華」

診療と、同州アラリア県とスパウル県の避難所16カ所での巡回診療である。合計で2578人(センター311人、巡回診療2267人)を診療した。主な症例は、呼吸器疾患(33%)、下痢(27%)、筋肉痛(14%)、胃痛(9%)、皮膚炎(9%)であった。AMDAは、ビハール州政府とユニセフ(国連児童基金)の協賛であり、インドの慶応大学と称されている。医学部の3割は海外在留学生の子弟である。インド人の子弟である。世界の中にインド人医師ネットワークをもっている。ちなみに、ドバイ、マレーシア、ネパールにもAMDA多国籍医師団の医師たちが話す言葉の方がよく通じた。

マニパール大学では、AMDAインド医療チームを迎え、学長ら首脳陣が出席して、大規模な祝賀会が開催された。同大

本部に、期待していなかった連絡が入った。「マニパール大学はAMDAの活動を全面的に支援することを決定した。今回国発の国際金融恐慌が世界中に暗雲を広げる中、AMDA本部が世界中に発生する災害被災者救援活動に必要な資金をどこまで負担できるのか。

今年中国・四川大地震の被災者救援活動では、AMDA台湾支部が台湾から派遣された医療チームの件費を事実的に負担してく

ことに、ビハール州ではカルナタカ州の言葉よりも、AMDAネパール支部の医師たちが話す言葉の方がよく通じた。

マニパール大学では、AMDAインド医療チームを迎え、学長ら首脳陣が出席して、大規模な祝賀会が開催された。同大

道支援に関する意識を誘